

# 同窓生 シリーズ

60



## 34回生 上原恵次

うえはら けいじ

### ◆プロフィール

1993年 都立新宿高等学校卒業(45回生)。1997年 慶應義塾大学理工学部電気工学科卒業。1999年 慶應義塾大学院理工学研究科電気工学専攻修士課程卒業。同年 株式会社 東芝に入社

私は新宿高校を一九九三年に卒業したので、今年でもう十三年になるうとしております。普通なら十三年も経っていたら母校を懐かしむものですが、未だかつてそのような気持ちにはなつたことがありません。その理由は、高校生活の中で在籍していたバドミントン部との関係が今も続いているからだと思っています。

そもそも私がバドミントン部に入ったのは、一年生の時の担任であった戸塚先生から声をかけられたのがきっかけでした。当時の私のバドミントンの知識は、それまで「バドミントン」を「バトミントン」と勘違いしていたぐらいど素人のレベルであり、先輩の練習風景を見てシャトル(羽のことです)があんなにも速く飛ぶことにものすごく驚いたことを覚えています。こうして、不安と期待を抱えながらバドミントンの世界に足を踏み入れたわけですが、高校での練習はコートが三面しかない状況で男女合わせて総勢二十名以上の部員がいたため、一日の中でシャトルを打つ時間は限られたものでした。その練習不足を補うために日曜日に練習が組まれていたこともあり、平日、休日問わずバドミントン漬けの毎日に

なつていきました。特に私は入部が遅かったので、早く上達するために体力面や技術面で一人倍の努力が必要でした。しかしバドミントンというスポーツは一人ではできないため、努力をするにしても同期や先輩の協力が必須であり、皆さんのバックアップを励みに頑張れたことが今でも財産になっています。結果的にはバドミントンの

実力という面でたいして上達はしなかったと思いますが、その時に同期や先輩と無我夢中に練習したことや疲れきつて電車で寝て帰った事、南口MYROADの上で食事しながらおしゃべりしたことなど、今でも鮮明に思い出せる程印象深いものでした。

そして、高校卒業後も大学でバドミントンを続けていきましたが、同期が高校のコーチを勤めていたこともあり、後輩の練習に度々参加させて頂きました。この部活の良き伝統は、卒業したらそれっきりではなく後輩の面倒を見てあげようと思つてOB、OGが非常に多いことです。そして世代を問わず上下間の繋がりが強いだけでなく、個々が自主的に後輩に対して行動してくれています。これは特別教えられたものでもなく、現役時代に戸塚先生やOB、OGの

指導で自然に身につけていった伝統だと思っています。

社会人八年目になって個人的に感じることは、勉学は知識であり仕事をする上で必要となれば本人の努力でどの年齢でも得ることができるものではないか? バドミントン部ならばバドミントンの技術でしょうか? それとも体力? 私が新宿高校バドミントン部で得られた一番大きなものは他人とのコミュニケーション能力かもしれない。部活動は単独でできるものではなく、部員同士が助け合うことで成り立っています。仕事も同様で一人で完結する業務は微々たるものです。多くの業務は他人との連携が必要であり、他人を気遣う努力がなければ進まないことが多々あります。そういう世界で現在頑張れるようになったのは、バドミントン部に入って良き同期と共に過ごした高校生活が基礎になっていると確信しています。これは一人の努力では決して得られないものであり、社会人として必要な能力でもあります。現役の皆さんは今も夢中で練習に取り組んでいると思いますが、部活動をやることで自然と身につけたことが社会人になって役立つ時が必ずやってくると思います。卒業してから十三年も経つてようやくわかるところに部活動の奥の深さがありますので、今はただひたすら頑張つていって欲しいものです。